

八 栗田彰子先生



栗田彰子先生
昭和20年 校庭にて

延岡市立延岡中学校の校門わきに『栗田彰子先生之碑』という石碑があり、時折、花を手にした方々が訪れ、目に涙を浮かべながら何かを語りかけている姿を見かけます。ゆり子さんは、今年、延岡中学校に入学して、「栗田先生ってどんな人なんだろう。」と思っていました。

日差しが強くなってきた六月のある日、担任の山本先生が「今月、二十九日に栗田彰子先生の慰霊式があります。みなさんは、栗田先生のことを聞いたことがありますか。」と話し始めました。

栗田彰子先生は、大正八年十月にカナダのバンクーバーに生まれました。ブリタニカハイスクールを卒業後、日本語教師になる志を抱いて来日し、母ハツ子さんの故郷である延岡市にやってきました。昭和十二年のことでした。その後、宮崎女子師範学校を卒業して、昭和十六年四月から延岡市安賀多国民学校（現在の延岡中学校）で教師として勤め始めました。栗田先生は安賀多国民学校に三年間勤めた後、カナダに戻り、日本人学校の教師になるのが夢でした。ところが、この年の十二月に日本はアメリカやカナダを相手に第二次世界大戦（太平洋戦争）へと突入することになってしまったのです。戦争が始まったために栗田先生はカナダに帰国することができなくなり、延岡での勤務を続けることになりました。

栗田先生には、いくつかのエピソードがあります。

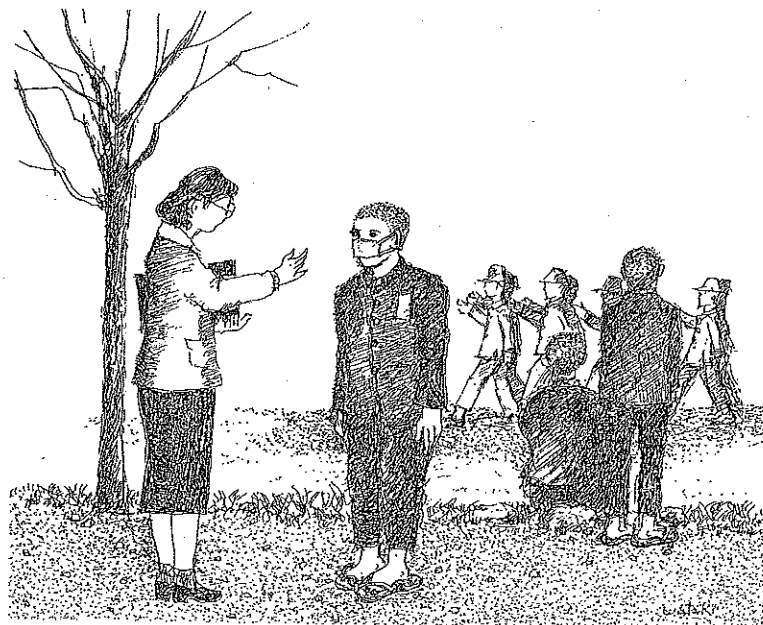
—まさお君は体が弱く、みんなが外で元気よく走り回っているときも、ぼつんと座って見ていることがよくありました。そんな時、栗田先生はまさお君に「今日は体の調子はどうですか。無理をしないでくださいいね。」としばしば声をかけておられました。—

—さちこさんは、病気でしばらく学校を休んでいました。ひさしぶりに学校に出てきましたが、その間に授業が進んでおり、内容がわからなくなっていました。そんなさちこさんに、栗田先生は「いっしょに勉強しましょう。」とにこにこしながら話しかけておられました。—

—戦争中は、みんながおなかをすかせていました。たかし君は、校庭に植えてあったさつまいもを食べてしまったのが見つかり、厳しくしかられました。目を真っ赤にはらして職員室から出てきたたかし君に、栗田先生はそつと近寄り、「おなかがすいたら、先生に話してくださいいね。いっしょに食べ物を探しましょう。」と優しく言ってくださいました。—

—みちこ先生は新任の先生として安賀多国民学校に赴任かたにんしました。緊張と不安でいっぱいだったみちこ先生に、栗田先生はやさしく言葉をかけ、励ましたり相談にのってあげたりしていました。

ある日、みちこ先生は、激しい口調くちようで生徒をしかつたことがありました。それを聞いていた栗田先生は、誰もい



ないところにみちこ先生をそつとよんで、こう言いました。

「墨汁ぼくじゅうを半紙に落としたら決して消えないでしょう。それと同じで私たちの言葉もとりかえしがつかないのよ。」――

いつも笑顔を絶やさなかった栗田先生でしたが、いつになく元氣のないことがありました。みちこ先生は、心配になってそつと聞いてみました。

「先生、お体の具合が悪いのではないですか。」

うつむいた栗田先生の白縁しろぶちの眼鏡の奥に、涙が見えました。「みちこ先生、ありがとう。でも、大丈夫です。」と涙をかくすように、しかし、しつかりした声で応えられました。

後からわかったことですが、ちょうどこのころ、カナダに住む栗田先生の弟が空軍のパイロットとして出征し、その身を案じてのことだったようでした。

昭和二十年になると、戦争はますます激しくなってきました。三月には延岡市に初めて爆弾が投下され、六月になるとB29爆撃機がひんぱんに延岡上空にもやってくるようになりました。当時の先生たちは、警戒警報けいかいけいほうが出されると、校舎を守るために、夜間でも学校に行かなくてはなりません。六月二十八日、午後八時ごろ、警戒警報が出されたので、いつものように栗田先生は他の先生方と一緒に出勤されました。

二十九日午前零時過ぎ、とうとう数十機のB29による爆撃が始まりました。シューシューという不気味な爆弾の落下音とともに、焼夷弾しょういだんが次々に落ちてきました。延岡市内はたちまち火の海と化しました。戦災者せんさい三百名を超え、延岡市を焼け野原に変えた「延岡大空襲」です。

学校近くにも次々に焼夷弾が落とされたので、栗田先生たちは防空壕くわうごうの中に身を隠していました。午前二時過ぎ、学校の寮りょうに大型焼夷弾が落下、炎上し始めたので、先生たちは防空壕を出て、消火活動を始めました。バケツを持ち、燃えさかる火のそばまで行って水をかけることをくり返し、ようやく火は消えたのですが、しばらくすると、今度は別の寮に小型焼夷弾が落下しました。栗田先生は、防空ずきんをぬらすために防火水そうに行き、バケツの水をかぶろうとした瞬間、焼夷弾が栗田先生の頭を直撃したのです。栗田先生はくずれるように倒れました。後ろにいた人が、「しっかりしなさい」と叫びながら、抱きかかえたときには、すでに息絶えていました。

それからわずか一か月半後に戦争は終わりました。当時の校長先生のたつての願いで学校葬せうざうが行われ、同僚の先生たちや教え子たちが別れを惜しみました。そして、昭和二十六年八月には、栗田先生と同僚や教え子たちが中心となって、学校の正門わきに『栗田彰子先生之碑』を建立しました。それ以来、毎年六月二十九日には、『栗田彰子先生慰靈式』が行われ、五十年の歳月がたった今でも、まさお君、さちこさん、たかし君、みちこ先生の姿が見られま

す。

山本先生の話聞いたゆり子さんは、学校から帰るとき、友達と連れだつて正門わきの『栗田彰子先生之碑』をもう一度見に行きました。じつと見つめていると、写真で見た栗田先生の顔が浮かんできて、なんだかとても穏やかなやさしい気持ちになっていく自分に気がつきました。